

北京自主独立教会とロンドン会(続)

—老舎が北京の教会活動を離れた理由 及びその創作活動への影響—

高橋 由利子

0. 本稿で取り上げること

0.1 本稿のテーマと前論文との関係

筆者は「中国文化」前号の第67号(2009. 6.27.)に「北京自主独立教会とロンドン会—1920年代に老舎の関わった北京の教会学校をめぐる—」と題する論文を書いた。⁽¹⁾

本稿はその続編である。そのため、題目は前稿のものに(続)を付け、章建てを連続させた。ただ、それぞれの論点を明確にするために、副題は別にした。

前稿及び本稿の共通テーマは、小学校長や視学官として初等教育の向上をめざしていた老舎が、1922年に視学官という要職を辞してまで関わったキリスト教会や教会学校の活動を続けることなく、なぜ1924年に北京を離れ、渡英したのかということである。

0.2. 前稿で検証したこと

この疑問を解決するために、前稿では、老舎の属していた北京自主独立教会とその宣教母体であるロンドン会との関係について、当時の状況を検証した。

その結果、老舎の関わった北京自主独立教会(缸瓦市教会)の運営責任者であり、その教会附設の小学校の校長でもあった宝広林と、その教会を建てたロンドン会との関係には最初から齟齬があったことがわかった。

0.3. 本稿で検証すること

本稿では、さらに教会学校と歴史状況に焦点をあて、北京に存在していた二つの教会学校—ロンドン会運営の教会学校と北京自主独立教会運営の教会学校—が、当時の政治状況の中で、どのように交わり、両者の間にどのような関係が生じ、そのことが老舎と、後に作家となった老舎にどのような影響を与えたかについて論じることとする。

なお、教会学校については、前稿の(二)に詳しく述べた。また前述したように、本稿の章建ては前稿の(三)に続く(四)から始まる。

四. ロンドン会教会学校移管の動きと宝広林

4.1. 自主独立教会をめぐる当時の動き

前稿(三)で述べたように、外国人宣教師組織によって建てられた教会や教会学校を現地中国人教徒の運営に移管し、宣教活動や教育事業を中国人に任せていくという流れが、1922年の上海会議以降の宣教師界の大きな方針としてあった。(三、3.1)

しかしながら、現地の個々の宣教師達がその大方針にどのように従い、実行していくかについては地域差、温度差があり、北京ロンドン会では、必ずしもその大方針のすべてを受け入れていたわけではなかった。(三、3.2)

では、ロンドン会の経営する北京の教会学校の責任者は、そのような状況のなかで、自分たちの教会学校を中国人に移管することについて、どのように考えていたのだろうか。以下それを見ていくことにする。

4.2. 移管への楽観と個人的思惑：ウッド女史の手紙 1924.8.3

ロンドン会経営の教会学校Girls' School(萃貞女学校)の校長であったウッド女史は、その校長職以外に、1924年9月からスタッキー氏に代わり、ロンドン会北方管区の責任者となった。

彼女は管区責任者として本部に送る報告書に添えた手紙にGirls' Schoolについて述べ、その運営を、宝広林を中心とする中国教会に移管する準備が進んでいることを詳しく書いている。⁽²⁾ 彼女は以下のような理由を挙げ、移管については非常に積極的である：

1. 中国政府の教育制度の変更により、学校経営の費用負担が増える。
2. 1年ほど前に本部あて送られた“Peking Policy”が我々のすべての仕事に中国側に移管されることをめざしている。
3. 特に学年の低い教育(初・中等教育)ほど運営しやすい。

そして、現在の進捗状況を、「今年9月から新学制に変更されるGirls' Schoolの運営について宝広林氏と話し合いを重ね、両者の間でGirls' Schoolの運営委員会の規約の草稿を作成中である」、「運営委員会が来年度中に結成されることを見込んでいる」と報告している。

さらに彼女は「これは、ロンドン会の学校の運営が、缸瓦市教会(自主独立教会)に移管されることに向けての第一歩」と述べ、「私の次の賜暇の前に契約が完了するとよい」とまで述べている。

これだけを見ると、彼女は純粋に学校の中国側への移管を願っているように

見えるが、これには実は別の思惑があった。彼女は同じ手紙の中で、Yenching Women's College（燕京女校）から宗教関係のスタッフとして招聘されることが決まり、ロンドン会の何人かにも相談し、それを受ける意向であること、それが、自分が今まで尽力してきた女子の初等・中等教育の向上にも役立ち、ロンドン会の経済的な負担を減らすこととなると縷々述べている。

ここから見てとれることは、彼女の移管推進の背景には、小学校の運営という面倒な仕事を離れ、より高等な教育の場に後顧の憂いなく移ってゆきたいという思惑があったということである。

彼女が2番目に挙げた“Peking Policy”も、決して、ロンドン会現地支部は中国側への移行をそれほど楽観的にはとらえていなかったし、彼女が信頼し、移管を話し合っている宝広林氏も、ロンドン会全体に完全に信頼されているわけではなかった。（三、3.2.および3.3.）

そもそも、彼女はこの“Peking Policy”が議論された時期、一年間（1922.7.19-1923.8.8）イギリスに帰国しており、北京には不在であった。また北京に帰って来てからも、すぐに（1923.9）北方管区の責任者となったので、管区全体の仕事に従事し、出張も多く、いかに校長の経験が長いといっても、実際には教育現場の差し迫った実態には触れる時間が取れなかったと考えられる。

従って、このような彼女の考えによって立てられた移管の計画は、必ずしも当時の実際の状況を反映したものではなかったことが推測できる。

それではその後、彼女が考えたように、移管は順調に進められたのだろうか？以下それについて検証する。

4.3. 移管への暗雲と不安：ウッド女史の手紙 1925.7.30

ウッド女史の移管に対する楽観的見通しは、1925年5月30日に上海で起こった日本人紡績工場でのストライキを発端とする反日・反英運動（いわゆる5.30事件）の影響によって微妙な変化があらわれた。この間の事情は7月30日付本部あての手紙に詳しく報告されている。⁽³⁾

この中で、ウッド女史は、進捗状況について、「学校運営の移管のための運営委員会が1925年5月には構成され、呉雷川、陳筱莊⁽⁴⁾、陳援菴⁽⁴⁾、宝広林の4人の中国側委員とドーソン氏、グリーブス女史の2人のロンドン会委員によって具体的な運営規約の検討が行われていた」こと、「ウッド女史には中国側からももう2年指導者として留まってほしい」との申し入れに対し、Yenching Women's College（燕京女校）へ移ることを伏せたまま、「全面的に協力してい

く」と答えたと言われている。

5・30事件の北京への影響については、「燕京大学をはじめとするほとんどの教会学校がその事件を受けて直ちに学生の活動の権利を認め、冷静に対処したことによって混乱と流血を回避した」こと、しかし「将来の道は決して平たんではなく、移管自体は慎重によく考えながら進めるべきである」とし、「唯一の疑問は自分があと2年間留まるべきかどうかであり、次週に中国側運営委員とこのことについて相談してから決める」としている。

また、その手紙の中で彼女が述べたもうひとつの不安は、「教会学校の中国政府への登録をめぐる、はたして教会学校での宗教教育の必修が登録以降も守られるかどうか」であった。

彼女は「高校と大学では宗教教育は選択でよいが、小学校と中学校では必修にすべき」と考え、「もし中国側の運営委員が今Girls' Schoolを登録することを強く主張するなら、自分が指導者として留まる余地はなく、中国人にまかせ、自分はYenching Women's College（燕京女校）に移り、そこでの宗教教育に身を投じる」という決意も述べている。

しかし彼女はまた一方で、「この騒動が一段落すれば、宗教教育と政府登録が同時に許されるだろう」、そして彼女は「大学で教育活動を続け、初等・中等教育に関わる教員や指導者を養成することなどに専念できる」とも述べている。

4.4. 学校の閉鎖と新学校建設：ウッド女史の手紙 1925.9.2

しかしながら、その後さらに悲観的な状況が起こる。ウッド女史はその2ヶ月後に本部あてに送った北方管区幹部会議の議事録⁽⁵⁾に添えた手紙⁽⁶⁾で、幹部会議で学校の閉鎖が決まったことを報告している。

その中で、ウッド女史自身は「その決定に反対した」とし、「自分は、中国人運営委員の協力を得てトラブル無く、学校を運営できると主張したが、幹部の多数は、反英騒動の激化に、このまま学校を続けても、学生運動展開の場所となるだけで、正常な教育活動はできないと判断し、北京のBoys' SchoolとGirls' Schoolを9月新学期に再開しないことを決定した」と述べている。

また、彼女はその手紙に英字週刊新聞の切り抜き⁽⁷⁾を同封し、「イギリス系教会学校に戻りたくない学生のために、新しい中等学校が10月にも開校される」というニュースを伝えている。その記事によると：

「馮玉祥將軍の資金援助を得て1925年10月に新しい学校ができ、中国人に

よるキリスト教教育を含めたりベラルな教育を始める。そのために頤和園の近くに500教室と宿舎を備えた建物を確保し、数日中に募集を始める。」

「それは、萃貞女学校(Girls' School)、萃文学校(Boys' School)を含むイギリス系5校の教会学校の学生代表が馮玉祥将軍、有名大学教授、教会学校教育者の支援を得た結果、実現したことであった。」

「彼らは他の教会学校、北京教会学校大学学生協議会の共感を得て、15校すべての教会学校の代表が『真理週刊』基金関係者やキリスト教教育者重鎮に助言を求め、最終的にイギリス系5校の学生が『真理週刊』基金関係者の紹介で張家口まで馮玉祥将軍に会いにゆき、馮玉祥将軍は10,000ドルの学校開設資金援助を承諾した。」ということであった。⁽⁸⁾

この記事がどこまで事実であるかは不明であるが、記事には多数の関係者の名前も書かれており、その他の固有名詞も含めて当時の状況を知る資料として極めて興味深い。また、同じようなことが、次に述べるハート氏の手紙でも述べられており、そのような学校が作られたことは、後のロンドン会の議事録でも言及されているので、かなりの信憑性を持つと思われる。

4.5. ロンドン会教会学校の閉鎖と宝広林：ハート氏の手紙 1925.9.4

前述したように、上海で起きた5・30事件の影響は、中国全土に及んだ。天津のAnglo-Chinese College（天津新学書院）に赴任していたハート氏からも本部に天津での騒動の様子を報告する手紙⁽⁹⁾が送られている。

彼はその中で、各地の教会学校での騒動の様子を紹介し、「排外・反英のデマや宣伝がおこなわれた」こと、天津の自分の大学では、「何とか卒業のための期末試験を行い、多くの学生が戻ってそれを受けた」ことを報告した。

また、ハート氏は自分も参加した北方管区幹部会議で、北京の学校を再開するかどうかについて議論したこと、その中で、「Boys' Schoolの宿舎に夏休み中も残って住むことを許された学生たちが、その恩恵を利用して反教会学校運動を展開し、学生たちに学校に戻るなどという手紙を出していたことが判明し、そのため、Boys' SchoolとGirls' Schoolの閉鎖が決まった」と書いている。

また、ハート氏は「管区会議が行われた前日に、北京の教会学校の学生代表が張家口の“クリスチャン”ジェネラル—馮玉祥将軍のところに行き、教会学校の存続に反対し、対抗する学校を作るための資金を将軍に求めた」こと、「馮玉祥将軍は援助を約束し、10,000ドルを寄付した」と述べており、これらは前述の新聞記事とも一致する。

しかし、驚くべきは、「その教会学校の存続に反対する活動の司令部が宝広林指揮下の缸瓦市キリスト教会にあったことが判明した」と述べたことである。ハート氏はさらに続けて「宝広林がどんな関与をしているのか、また北京支部がこのような新しい形の愛国心をどう見ているのか知らないが、自分にとっては非常にショックであった」としている。

ここでハート氏は、宝広林に対して、かなり厳しい評価を下しているが、このことは宝広林の動きと宣教師との関係を考える上で、極めて興味深い。

五. 教会学校登録法と缸瓦市教会の要求: ウッド女史の手紙 1925.11.26

5.1. 当時の教会学校をめぐる2つの動き

(四) 4.3.でウッド女史がすでに言及したように、当時、宣教師が運営する教会学校すべてに関わる登録問題が持ち上がっており、それは中国政府の教会学校登録法の公布により明らかになった。

その他に、もう一つロンドン会経営の教会学校—Girls' School(萃貞女学校)とBoys' School(萃文学校)—(前述したように当時は一時的に閉鎖されていた)に関わる大きな展開があった。

それは缸瓦市キリスト教会からの要求で、ロンドン会の教会学校の土地建物を缸瓦市キリスト教会附設小学校が借用したい、というものであった。

この教会学校をめぐる2つの動きについてウッド女史は、本部にあてた同じ手紙の中で詳しい報告を行っている。⁽¹⁰⁾ まず先に登録法から見ていこう。

5.2. 1925年11月16日の教会学校登録法

登録法とは、当時出された外国人経営の教育機関に対する通告である。⁽¹¹⁾

その英訳⁽¹²⁾をウッド女史が引用し、本部への手紙に入れた。これについてのさらに詳しい内容や歴史的背景とその説明は後にロンドン会本部からパンフレットとして発行されている。⁽¹³⁾

この外国人学校に対する政府教育部の通達はウッド女史の手紙では以下の6点にまとめられているので、それを引用して内容の説明に代える。

1. 外国資本で作られた学校は、中国政府教育部の規定に従っていれば教育機関として正式に登録を申請できる。
2. その場合、学校の名前の前に必ず「私立」と入れなければならない。
3. 学長・校長は中国人でなければならない。
4. 運営委員の過半数は中国人でなければならない。

5. 宗教宣伝を目的にしてはならない。

6. カリキュラムは教育部の規定にそっていなければならず、宗教科目を必修にしてはならない。

以上がその要点であるが、その最後の5と6について議論が巻き起った。つまり、宗教宣伝や宗教科目を抜きにして教会学校の教育が成り立つのかという疑問が宗教界から出されたのである。

その疑問点に対し、5と6の趣旨は、宗教および宗教科目を強制してはならないということだけであって、宗教を教えたり、宗教を科目として持つことは自由であるという中国政府の説明⁽¹⁴⁾で決着を見、ロンドン会としては登録は各学校の判断に任せるとした。

ただ、この時ロンドン会の教会学校は閉鎖中であり、それほど大きな問題とはならなかった。

次にもうひとつの大きな動き——缸瓦市教会からのロンドン会への借用要求を見ていこう。

5. 3. 缸瓦市教会からのGirls' School (萃貞女学校) 校舎借用請求 : 1925.10.27

缸瓦市教会からロンドン会への借用請求については、北京支部の1925年10月27日の北京支部会議で討議されており、ウッド女史はその議事録の抜粋を同じ手紙⁽¹⁵⁾に書き、本部に報告した。

以下がウッド女史のまとめた概要である。

「缸瓦市教会から、現在閉鎖中のロンドン会Girls' School (萃貞女学校)の校舎と設備を、缸瓦市教会が教会内に附設している小学校(銘賢小学)に借用させてほしいという要求がなされた。」

「その要求は、この小学校は現在生徒が200人を超え、手狭になる上に、将来さらに幼稚園と中学を作る予定もある、また小学校が教会から移ることによって教会内に他の活動に使える場所をふやすことができる等の理由によって出されたものである。」

「しかし、このことはロンドン会がGirls' School (萃貞女学校)を放棄するかという問題にもなり、また関係してくるのはBoys' School (萃文学校)だけでなく、ロンドン会全体の教育ポリシーにも関わってくるので、上に挙げた彼らにとっての必要性をチェックする必要がある。」

「また、この際、北京支部からBoys' School (萃文学校)と平民学校(缸瓦市教会が運営を委託されている中学校)との併合を考える案が出された。」

「議論の結果、この缸瓦市教会からの要求を管区の教育委員会に送り、なるべく早く教育委員会で検討するという手紙を缸瓦市教会に送った」。

以上がウッド女史の手紙の概要であるが、彼女は最後に個人的な見解として「Boys' School(萃文学校)については、このGirls' School(萃貞女学校)とは、切り離して考えるべきである」と付け加えている。

それではこのような缸瓦市教会から出された借用要求に対し、ロンドン会は最終的に、どのように対応したのであろうか。以下それを見ていくこととする。

5. 4. 1926年2月の北方管区会議：缸瓦市教会の借用請求受け入れの決定

1926年2月12日から19日に開かれた管区会議で、借用請求に対する教育委員会の報告が読み上げられ、満場一致で可決された。¹⁶⁾その議事録がウッド女史から本部に送られた。以下はその議事録の概要である。

「現在、北京西区におけるキリスト教教育活動は、ロンドン会が運営するBoys' School(萃文学校)とGirls' School(萃貞女学校)があるが、それらは一時閉鎖中である。」

「その他に、ともに缸瓦市教会が運営する小学校(銘賢小学)と中学校(平民学校)がある。その小学校(銘賢小学)は缸瓦市教会内附設であり、6年制で280人の生徒をかかえ、肥大化して教会の他の活動に使う施設の確保に支障をきたすようになった。」

「中学校(平民学校)はもともと国会議員で教育部にも属する中国人が慈善学校として始めたものを、缸瓦市教会に運営を委託したものであるが、去年の夏から缸瓦市教会との関係から教会学校となった。この学校は150人から200人の男子生徒をかかえ、校舎を借りる費用、年間2000ドルの調達に支障をきたすようになった」。

「そのほかに2つの学校——1つは男子校、もう1つは女子校——が、やはり去年の秋から中国キリスト教界の後援のもとに、外国人宣教師の学校には戻りたくないが、キリスト教教育を受けたいという生徒を受け入れている。彼らは特に缸瓦市教会とは直接の関係はないが、北京の中国人教徒の教育を推進する活動である。」

「北京におけるキリスト教教育活動の特徴は、このように中国人キリスト教社会が教育に深くかかわっていることである。ロンドン会は、今までこれらの活動が宝広林氏一人に依存し過ぎており、そのような状態で、さらに中等教育の基礎ができるまで進展できるかどうかについては懸念を持っていた。」

「しかし、最近、宝広林氏が東区教会（米市教会）の担当も兼ねるようになり、また、今、北京のすべての自主独立教会を統括する連合組合ができる十分な見通しが立った。もし、それが実現するなら、それは北京におけるキリスト教教育を進展させるものである。」

「我々は中国教会に権限を委譲していくというポリシーに基づき、ロンドン会が運営する Boys' School (萃文学校) と Girls' School (萃貞女学校) の建物を、教会が認定する管理委員会に委譲すること、また、この措置に基づき、缸瓦市教会には Girls' School (萃貞女学校) の建物と設備を彼らの要求通りその小学校のために使うことを許可する。」

「以上の趣旨に鑑み、校舎及び施設・備品の使用料は、名目的なものとして少額とする。ただし、双方とも学校年度の1年前までの通告で、使用契約を破棄できる。委譲が円滑に行われるまで、各学校に建物の維持補修費として年間100ドルの補助金を支給する。建物の点検は中国側が行い、建物に掛ける保険金はロンドン会が負担する。」

以上のことから、ロンドン会は宝広林の缸瓦市教会が独自に運営する教会学校と、その他の中国人教会学校（宝広林が実質采配を振う）に対し、多大な資産と補助を差し出すこととなったことがわかる。

これは今までロンドン会とはさまざまな軋轢があった宝広林にとっては画期的な大勝利であるように思われる。

また、宝広林に不信感を持っていたロンドン会にとっては屈辱的敗北である。このことは、わざわざ、これからは宝広林一人ではなく自主独立教会の連合組合全体で教育活動を担う見通しを書いたところにも、その屈折が見て取れる。

しかし、ことはそれほど単純に運ぶものではなかった。それは、この議事録に付けられたウッド女史の手紙から予測できるものであった。以下それについて検証する。

5.5. 議事録に付けられたウッド女史の手紙：コメントと思惑

ウッド女史は、上の議事録に付けた1926年2月26日付本部あての手紙で、缸瓦市教会に対する補助金について以下のように述べる：

「これは次のような考えからでたものです。いずれは中国側管理者は、すべての建物や施設の維持と補修が彼らの責任となることが、どれほど経費のかかることかについて、もっと注意深くなるでしょう。だからこそ、“建物の維持補修のための補助金” を与えることが、我々の寛大な恵みを示すと同時に、より

政治的な意味を持つのです。年間100ドルの補助金では永久に維持補修には間に合わないでしょう。Girls' School(萃貞女学校)の1924年から1925年の年間経費は26,602ドルでした。おそらくBoys' School(萃文学学校)はもっと高いと思われます。」

つまり彼女は、経費のかかる学校の建物を中国人に委譲し、維持補修費まで与えることは、ロンドン会の寛大さをアピールすると同時に、将来の自分たちの経費を節約できるという戦略的意味があると述べ、さらに、近い将来の缸瓦市教会や中国人の学校運営の破綻を予測しているのである。

そしてその予測は、1年数か月後、彼女が賜暇によりイギリスに帰国していた(1926年7月5日から1927年9月10日)時に、見事に的中した。

5. 6. 1927年8月の本部の宝広林に関する秘密報告書と宝広林の失脚

ロンドン会本部の責任者Hawkinsは1927年8月8日に缸瓦市教会と小学校(銘賢小学)、中学校(平民学校)を舞台にした政治事件の摘発により、缸瓦市教会の職員一人が逮捕処刑され、宝広林・宝広林の秘書・缸瓦市教会の会計係・2つの学校の責任者会計係が失踪した経緯について、北京に来て調査し、その経緯をロンドン会の秘密報告書にまとめた。⁽¹⁷⁾ その全容については拙稿「北京缸瓦市教会と宝広林」⁽¹⁸⁾に詳しく書いたので、ここでは、報告書の教会学校に関係する点を以下にまとめる。

：逮捕処刑された職員は宝広林のアシスタントを務め、缸瓦市教会を実質的に宝広林に代わり運営していた。宝広林は北京協会連合組合のSuperintendentとなっており、前述の2つの学校の運営委員を兼ねていた。

：ロンドン会が缸瓦市教会に校舎を貸したその2つの学校では、宗教教育は行われておらず、1927年には市民教育の名のもとに、政治教育が行われた。また、宝広林により、不審な人事が行われ、不明朗な支出があった。また、そこでは、3室に特別な鍵が作られ、秘密の政治集會に使われた。宝広林や処刑された職員はその集會に参加していた。宝広林は事件発覚後、大工にその部屋の扉を壊させ、中に入って大量の文書を取りだし、焼却した。

：2つの学校の生徒数は減少し、多大な赤字が蓄積されていた。

：このような事件が教会や教会学校を舞台にして起きたのは、北京での宣教師の空白状態と早すぎる権限の移譲に、その原因がある。

5.7. 老舎が関与してきた教会学校とロンドン会

以上、本稿で今までに検証したことをまとめると以下ようになる。

：従来ロンドン会が北京で経営してきた2つの学校が、1925年5月30日の上海事件の政治的余波により、閉鎖を余議なくされた。

：宝広林はロンドン会経営の教会学校を将来中国人の運営とするための協議の当事者でありながら、一方では反教会学校の動きに関わっていた。

：さらに、ロンドン会の教会学校の閉鎖後、その施設の借用を申し入れ、自らの缸瓦市キリスト教会附設の教会学校をそこに移すことを請求した。

：それに対し、ロンドン会は教育事業を中国人に委譲するという美名のもとに、その請求を受け入れ、コストのかかる学校の施設を引き渡したが、一年余後におきた政治事件により宝広林は失脚し、缸瓦市教会附属の学校の経営はその後ロンドン会主導で行われた。

ここで、もう一度前稿で検証した、老舎が関与してきた教会学校をめぐる動きに立ち戻り、そこから全体の流れを述べてここまでの論考のまとめとする。

前稿(一)(二)(三)で述べたように、老舎は1920年代の初めから北京缸瓦市教会の教会活動に加わり、教会の運営者宝広林を助けて、その教会がロンドン会から中国人の自主独立教会となる時の設立規約を起草したり、教会附設の小学校などの教育活動に従事してきた。(1.2)(2.1)

これらの活動は当時の中国におけるキリスト教会の中国化・自主独立化という全体的流れに沿うものであった。(3.1)

しかし、この全体的大方針は、個別の各地域において、必ずしも全面的に受け入れられたわけではなかった。(3.2)

さらに、宝広林を中心とする北京缸瓦市教会とロンドン会宣教師との関係に焦点をあてると、そこには当初からさまざまな矛盾を含んでいた。(3.3)

老舎の関わった教会の教育活動や宝広林の教会活動も、ロンドン会宣教師からは「学校活動はあるが伝道活動はない」と報告され(3.3.4)、ロンドン会本部からの活動は正要求を引き起こした。(3.4)

また、老舎が教会の経営自立化の鍵と規約に述べた(2.2.5)英語学校は、結果的にはクラスをこれ以上増やさないということで済んだが、ロンドン会本部からは廃止するよう申し入れがあった。(3.4)

老舎が教務主任を務めたことのある教会附設の小学校は、ロンドン会所属の教会学校の施設を委譲されたが、すぐに経営破綻し、政治事件の舞台となった。

これらの一連の動きの背景には常に老舎の盟友宝広林とロンドン会の間の葛

藤があった。

六、結論

以上、前稿と本稿の2回にわたって、ロンドン会と教会学校をめぐる関係を検証した。ここで最初の疑問、老舎はなぜ北京の教会学校の仕事を続けずにイギリスに行ったかに立ち戻って考えると、それは上に述べたような中国教会の自立化という美名のもとに隠された、宣教師と中国側の葛藤という政治的背景があったためであり、老舎はそのどちらの側に対しても自分を投入することができなかつたためではないかと推測できる。

老舎が教会活動や教会学校に従事していた時期は、宣教師と中国側の虚々実々の駆け引きが進行しており、老舎が中国を離れイギリスに発つてからもその葛藤は益々複雑化し、激しさを増していった。

老舎は、中国教育界の醜さに嫌気がさして要職を辞職した後、清貧の生活に甘んじて、キリスト教会や教会学校の活動を通して自分が中国教育界では果たせなかつた理想を実現しようとした。それにもかかわらず、そのキリスト教活動の実際の現場にも、自分がかつて身を置いた中国教育界で見たものと同じものを感じとり、イギリスに行くことにより、そこから離れたのである。

老舎は一度中国教育界に失望し、挫折感を持ってそこを去り、自分の理想を実現するために教会活動に入ったが、そこでも、その実現のための希望を見出すことができず、同様の挫折感を味わつたと考えられる。

ただし、老舎が味わつたものは挫折感だけではなかつた。当時のロンドン会は見込みがあると判断した中国人信徒に対しては、組織的な援助を行つていた。ロンドン会の議事録にはたびたび、あるセクションで余つたお金を中国人信徒の学費や奨学金として転用するという決定が報告されており、老舎もそのような資金で北京大学の授業を受けたことがある。⁽¹⁹⁾

また、老舎はロンドン会のコネクションを通じてイギリスでの中国語教師という職を得、渡英し、そこで小説を書き始めたことが作家となるきっかけとなつた。従つて老舎は教会からは去つたが、そこから得た現実的利益も、少なくともはなかつたと言ふことができる。

そしてさらに、老舎の教会活動の経験がその後作家となつた老舎の創作活動にまったく反映しなかつたわけではない。老舎の最初の小説である『老張の哲学』では、中国社会の醜い側面と中国教会の欺瞞的側面が細部まで描かれている。また、小説のプロットや描写にもキリスト教の信仰的側面も反映されてお

り、かつて筆者はそのことについて指摘したことがある。⁽²⁰⁾

ただ、今回この論文を書いていくうちに気付いたことは、小説の内容についての影響だけではなく、小説を作成する具体的技術についても老舎はその教会活動の中で身に付けていったのではないかということである。

つまり、それは老舎が北京での教会活動を通して、ちょうど彼がかつて教育界で視学官として数々の教育に関する報告書を書いたのと同様に、教会での社会奉仕活動では知識人として、その対象である中国人や中国社会についての数々の報告書を書いたりしていたと筆者は推測している。そしてその中で、知識人としての文章力を高め、それが宝広林や教会内部でも認められたからこそ、教会規約の起草という重責を任されたのではないだろうか。

そのような経験を通して、老舎は将来作家として中国社会を描いていくための客観的な分析方法と、それを描く具体的な執筆方法をも身につけていき、それが後に作家となる老舎の一種の職業訓練となったのである。

老舎はイギリスに来て中国語教員を務めるかたわら、小説を書き始め、イギリスにいる間の5年足らずの間に3つの長編小説を書き上げ、それを中国の雑誌に投稿、掲載されて作家として認められるが、彼はイギリスに来て突然小説が書けたのではなく、その前に関わっていた教会活動の中で、挫折感を味わいつつも、作家としての観察力と表現方法を身に付けていったと考えられる。

その具体的な一例を示すと、老舎の代表作とされる『駱駝祥子』は北京の人力車夫を描いた小説であるが、この人力車夫については、前稿(三)3.4.3のPeking Reportに書かれている宝広林の缸瓦市教会の地区活動の中に、貧民救済事業と並んで、人力車夫の実態調査を行ったことが挙げられている。

この実態調査に、当時宝広林の盟友である老舎は深く関わり、その報告書をまとめるという作業にも参加していたと筆者は推測している。

老舎の代表作『駱駝祥子』には1920年代の北京の人力車夫の悲惨な生活が活写されているが、老舎は後に、「1936年の初めに、当時勤めていた山東大学の同僚からある人力車夫のことを聞き創作意欲をかきたてられて資料を集め始めた」と書いている。⁽²¹⁾

老舎の意識下には、1920年代の教会活動で中国下層の人々や人力車夫の実態調査に関わり、その詳細を記録し、社会的分析を行った基礎があったからこそ、そのようなきっかけや資料収集を生かして、小説を構成できたのである。

老舎は北京の教育界に失望し、要職を辞して教会活動に参加したが、そこで教育経験や教会活動でも理想を実現することなく教会を離れた。

しかし、その経験や活動を通して老舎が得たものは、後に作家としての老舎を誕生させ、その成功の糧となり、作家活動を支える原動力となったのである。

注

(1) 前論文の章建ての概略は以下のとおり：

- 一、はじめに：1.老舎とキリスト教，2.老舎とロンドン会，3.老舎が北京に戻らなかった理由，4.老舎が北京を離れた理由，5.本稿で検証する事柄と資料
- 二、老舎と教会学校：1.老舎の教育者としての経歴と教会学校，2.教会学校とは何か，3.老舎が教会学校に関わった時代の大きな流れと北京の実際の状況
- 三、当時の北京ロンドン会の動き：1.中国教会自立化の潮流，2.Policy for Pekingに対する現地の回答，3.北京スタッフの不足と宝広林に対する批判

(2) 1924. 8. 3. Wood to Hawkins, (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box 24, 以下注3から注9,および注12はすべて同Box24)

(3) 1925. 7. 30. Wood to Hawkins

(4) 原表記はそれぞれChen Shao Chuang, Chen Yao An. 漢字表記は劉賢：陳垣基督教信仰考（史学月刊2006年第10期）p.84の指摘に拠る。

(5) 1925. 8.28/29 Minutes of Executive Committee of the North China D.C.

(6) 1925. 9. 2. Wood to Hawkins

(7) 1925. 8.30. *Chinese Leader* (Sunday's Paper)

(8) 馮王祥は『我的生活』（2006, 世界知識出版社）p.344で、北京に「今是学校」を作り、五卅運動で教会学校を退学となった「大中学生」を受け入れたとしている。

(9) 1925. 9. 4. Hart to Hawkins, letter

(10) 1925. 11. 26 Wood to Hawkins, letter

(11) 鄭雲郷は『文化古城旧事』（1995, 中華書局）p.91で、中国は一貫して教会学校に対し放置政策を取ってきたが、五四運動・五卅運動の圧力を受け、やっと北洋政府が1925年11月に「外人捐資設立学校認可辦法」を公布し、1926年10月に広東国民政府も「私立学校規程」を公布したとし、その概要を書いている。それに拠ると、ウッド女史が述べた「登録法」の概要は、この「認可辦法」と「学校規程」を合わせたものとなっている。また、「当時の北平の教会学校（中・小学校）は教会が経費を出していたが、また生徒の月謝も高く、貴族学校化しており、少人数教育でレベルも高かった。」（同p.92）としている。このような記述からロンドン会経営の萃貞女学校（Girls' School）と缸瓦市教会附設小学校の間にはかなりの格差があったと考えられる。

- (12) 1925.11.19, *Chinese Leader* に掲載されたもの、(12)の手紙の中では
 “Statement Regarding L.M.S. Peking Educational Work” と報告。
- (13) Hawkins, *The Registration of Mission Schools and Colleges with the Chinese Government*, (pamphlet, London Edinburg House Press, 1926)
- (14) 注(13)のパンフレット裏表紙の中国教育部の説明(1926.7.6英訳)に拠る。
- (15) 1925. 11. 26 Wood to Hawkins, letter
- (16) 1926. 2. 12/19 Minutes of Annual Meeting of N. China D.C.
 (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box25)なお、ここでは、
 Girls' Schoolの校舎を小学校(銘賢小学)に貸し出すとしているが、後にBoys'
 Schoolも中学校(平民学校)に貸し出されている。
- (17) Mr Pao Kwang-Lin and the Peking Federation of Chinese Churches ,
 Confidential Report of Mr. F. H. Hawkins on various matters arising in
 connection with his visit to China, August 1927- March 1928. (CWM/LMS
 China Committee Minutes 1928.5.31/6.1.)報告是北京晩報(1927.8.24/27)を引用し、
 北京の某教会を内偵していた警察が、馮玉祥の命を受けた騒乱の企てを摘発し、武
 器を押収、15人を逮捕したとしている。
- (18) お茶の水女子大学中国文学会報20号(2001)
- (19) Minutes of N. China D.C. February, 1924, appendix 1, Report of Executive
 committee, Feb. 1st (CWM/LMS North China, Incoming Correspondence Box25).
 なおここでは詳述しないが、老舎と教会活動を共にし、イギリスでも一時同宿した
 許地山も同様の援助を多く受けている。
- (20) 以下の3論文を参照：老舎の文学とキリスト教(1)—『老張的哲学』—上智大学
 外国語学部紀要19号(1984), 老舎の文学とキリスト教(2)—『趙子曰』と『二馬』
 一同紀要20号(1985), 老舎の文学と文学観—初期三部作と『離婚』について—慶応
 大学芸文研究54号(1989)
- (21) 我怎樣寫《駱駝祥子》—《青年知識》雜誌、第1卷第2期(1945)

後記：当時北京の禮路胡同(現在の西四北頭条)にあったロンドン会経営のGirls'
 School(萃貞女学校)の建物は新中国成立後も健在で、北京第四十一中学として使わ
 れており、筆者が1994年8月に訪れた時には四階建ての建物正面に「萃貞女學
 校」と彫られた校名を見ることができた。

(上智大学)